



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 37 回 日本語教育方法研究会 京都外国語大学 2011 年 9 月 10 日 (土)

今回は京都外国語大学で研究会を開催いたします。2011 年は、京都外国語大学日本語学科の設立 20 周年にあたる年とのことです。また、春の研究会が中止になりましたので、下記の通り、総会も行い、CiNii への研究会誌の掲載についても、改めてお諮りする予定です。皆様、是非ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

会長 川村よし子

TABLE 1 第 37 回研究会開催について

日時 :	2011 年 9 月 10 日 (土)
会場 :	京都外国語大学 1 号館 (正門左手) 7 階
開催委員 :	中川良雄 (京都外国語大学) 金庭久美子 (事務局, 横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付 ポスター貼付	1:50	総会 (CiNii について等)
9:30	一般受付	2:20	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:20	会場移動
10:05	会の進め方の説明	3:30	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	5:00	講評, 次回開催委員挨拶
11:10	会場移動		閉会の挨拶
11:20	ポスターセッション開始		参加者全員で片付け
12:50	昼食・休憩	5:45	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 短期留学生特有の問題解決に向けた教材開発の試み—中上級教材『きつとうまくいきますよ』の作成と改訂—

内藤真理子（立命館大学）・小森万里（大阪大学）・高橋旬子（立命館大学）・辻恵子（立命館大学）

大学で学ぶ短期留学生と就学生は学習目的や環境などが異なっている。しかし、既存の中上級教材は就学生向けのものが多く、必ずしも短期留学生に適したものとは言えない。そのため、我々は短期留学生向けの教材の必要性を痛感し、その作成に取り組んだ。本発表では、短期留学生特有の問題・課題を指摘し、その問題を解決するための教材作成の過程について述べる。さらに、その後のアンケートの結果に基づく改訂についても言及する。

2. 日韓二字漢語の動詞化および形容詞化—語彙資料としての提案—

朴善嫻（名古屋大学 大学院生）

日本語では、名詞に-suru が付き、動詞になる(サ変動詞)。このようなプロセスは、韓国語にもあり(-hada)、日常での使用頻度も高い。本研究では、日韓漢語の形態的な類似点と相違点を明確にするために、旧日本語能力試験出題基準 4 級から 2 級の語彙のうち、二字漢語を抽出し、韓国語の-hada や日本語の-suru が付く語の数をカウントした。そのデータの結果を基に、日本語と韓国語の漢語の間に存在している類似点や相違点を探りたい。

3. 自己理解の説明をめぐる学習者間の相互交渉—読解授業の試み—

ボイクマン総子（東京大学教養学部）

中級後半から上級レベルの読解授業において、読んだ文章を自分はどう理解したのか-自己理解-を 3 人 1 組の仲間に説明報告させるといった活動を行った。この活動の発話のやりとりを分析した結果、学習者は単に、自分の文章理解との同意や不同意を表明するだけでなく、追加説明を行ったり、問題提起や質問をするなどの相互交渉を行ったりしていた。この活動によって、文章の自己理解の強化や見直しが達成されたと考えられる。

4. Moodle を活用したブレンディッドラーニングモデルの構築とその有効性—上級日本語文法 BL モデルの再改良と教育効果—

篠崎大司（別府大学）

本稿の目的は、日本語能力試験 N1 文法対策として改良したブレンディッドラーニング授業モデルの有効性を検証することである。具体的な改良点は以下の 2 点である。(1)新傾向文法問題を 130 問追加した。(2)各問題の評点表示を「平均評点」から「最大評点」にすることによって、学習者の学習動機を高めるよう工夫した。検証の結果、アンケートによる学習満足度調査では、80.0%の学習者が本モデルに肯定的であった。また、テストによる教育効果測定では、平均点で 38.1%の向上が見られた。

5. 中国の学習者に見られる外来語習得 —海外と国内で学ぶ学習者を対象とした調査の結果より—

上野山愛弥（京都外国語大学）

日本語を学ぶ多くの日本語非母語話者にとって外来語の学習は苦手とする項目であると思われる。しかし、外来語は日常生活の中で確実に増え続けていることから、語彙教育上の重要項目になると考えられる。よって、本研究では、中国と日本国内の日本語学習者を対象として行ったアンケート調査の結果を分析し、学習者が認知し使用している語彙とその習得に関わる要因を見ていった。中国と日本国内の上位には異なる語もあり、相関関係にも違いが見られた。だが、平均値と学習期間の関係では、どちらにもある期間が過ぎると使用頻度が下がる語が含まれていた。下位は語によって中国と日本国内で異なった傾向が見られた。学習期間だけでなく日常生活の中に事物が存在しインプットを受ける機会があるかどうかということも要因として考えられる。

●ポスター発表（上記5件を含む12件）

6. 単語難易度と出題頻度に配慮した介護福祉士候補生のための語彙リスト作成

野村愛（聖隷福祉事業団）・川村よし子・斉木美紀（東京国際大学）・金庭久美子（横浜国立大学）

経済連携協定で来日した介護福祉士候補生は、国家試験合格のため、試験問題に出てくる語を効率的に学ぶ必要がある。そこで、国家試験の使用語彙調査結果をもとに、高頻度語のうち、旧 JLPT3・4級の語のみを除外した試験に出る「介護単語 808」を作成した。初級修了程度の学習者の使用も考慮し、やさしい日本語での意味説明、英語、インドネシア語訳を添えた。また、同じ漢字を用いた語彙を効率的に学ぶ方法を考案した。今後はこれをもとに教材作成の予定である。

7. 「観光日本語中・上級シラバス」作成の基礎調査

総田はるみ（横浜商科大学）

日本政府は訪日外国人 3,000 万人を目指し、様々な施策を打ち出している。そのため、今後観光業界で働く外国人の数は増え、それに伴い、観光学を専攻とする留学生数も増えると思われる。そこで観光学を専門とする日本語学習者向けのシラバスを開発したい。観光学を専攻とする留学生の学習支援を目的とし、中上級者向け観光日本語のシラバス作成に必要な基礎調査を行った。本稿では、その報告を行う。

8. 国内進学目的学習者の求める日本語教師と授業—学習レベルから見えてくるもの—

天満理恵（帝塚山大学）

日本国内において進学目的で日本語を学ぶ学習者の求める教師と授業を探ることを目的に質問紙法による調査を実施、統計処理を行った。その結果、レベル間に有意差が認められ、学習者のレベルにより求められるものが異なることが明らかになった。有意差が認められた項目を平均値とともに分析したところ、初級学習者は質問後の指名、初級・中級学習者は机間巡視、上級学習者は誤用直後の訂正を求めている。また、初級学習者と上級学習者の間に多くの有意差が認められたことから、中級学習者は日本語力のみならず、教師や授業に対する考えも初級と上級の間にあると考えられる。

9. スポーツと日本語教育

清水泰生（マスターズスポーツ科学研究会）

本研究で日本語教材でスポーツがどのように扱われているのかについて考察をした。初級レベルの教科書は、教科書によってスポーツ種目・用語に差異が見られた。中上級のレベルの教科書はスポーツを取り上げているものはそれほど多くなかった。そしてスポーツ（東京マラソン）に関する新聞記事を使った授業の例を紹介した。

10. 日本語クラスと中国語クラスの合同授業が双方の学習者に及ぼす影響の分析

権藤早千葉（久留米大学）

留学生の日本語クラスと大学の中国語クラスの合同授業は6年目を迎え、多くの中国語クラスで取り入れられるようになってきた。合同授業に対する主な期待は、それぞれの言語学習の動機づけになることと交流活動である。L2 使用による成功や失敗から学習目標が設定でき、また異文化との接触体験をする意義は大きい。授業アンケート、教師へのアンケート、学生へのインタビュー資料から合同授業の役割を分析する。

11. 中級会話教育における自己評価表—内省から行動への一歩のために—

中村フサ子・斉木ゆかり・小笠恵美子（東海大学国際教育センター）

2010 年度の中級会話クラスに自己評価表を導入した結果、学習者は会話能力を向上させたものの、(1)自身の発話に対する内省、(2)内省に基づいた発話では問題が認められた。これらの問題を解決すべく、学習者の気づ

きを促し、次の行動を起こさせるような自己評価表の作成に取り組んだ。そして、この評価が次の会話授業に反映されているかを検討し、学習者が自身の問題点をより具体的に記述できるように評価表を改善していった。研究の目的は自己評価表の変化に伴う学習者の反応を検討することにある。具体的には自己評価表、学習者の発話、学習者の感想から評価する。

12. アカデミック・ライティングのための意見文の構造化の試み

脇田里子（同志社大学グローバル・コミュニケーション学部）

アカデミック・ライティングを支援することを目的に、新聞の意見文の構造化を試みる。分析対象とした意見文は、新聞における読者の投書、社説、オピニオンの3種類である。鈴木(2004)の「議論の多面的分析方法」に倣って、意見文を形式段落ごとにコーディングし、意見文の形式段落間の論理展開を構造化した。そして、意見文が垂直方向と水平方向に展開することを可視化する。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

13. 学部教養科目で求められる「知的活動」に関する調査—アカデミックな日本語力養成のための教材開発に向けて—

工藤嘉名子・大津友美（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

教養的テーマをコンテンツとする中級教材開発に向けた探索的研究として、ウェブ上でシラバスを一般公開している12国立大学の全学教養教育科目のシラバスを対象に、学部教養科目で求められる知的活動に関する調査を行った。シラバスの中から受講生に課されている課題や行動に関する記述箇所を抽出し分析した結果、計12の知的活動カテゴリーに分類された。該当科目数の多かったカテゴリーは、順に「意見交換」「口頭発表」「レポート」「実技・実習・実験」「実地見学・実地体験」であった。学部教養教育では、授業への積極的な参加と学習成果の発信、能動的な知識獲得・運用が求められているという結果が得られた。本調査で得られた知見をもとに中級レベルの学習者に相応しい知的言語活動を考えると、ディスカッションやディベート、地域観察や地域の人へのインタビュー、報告書や小レポートの作成と口頭発表といった活動が妥当ではないかと思われる。

14. 学習者のポートフォリオ作成と自己評価に関する実践報告—超上級クラスにおける「速読」・「レポート」を連動させた授業の中で—

安達万里江（京都日本語教育センター）

本稿は、筆者が担当する授業で初めてポートフォリオ評価の導入を試みた実践報告である。今回、日本語が超上級の学習者を対象とした「速読」と「レポート」の2科目を担当した。その中で学習者にポートフォリオの作成、自己点検・自己評価を指導し、どのような成果があり改善点があったかについて報告する。また、来期に向けた新たな課題についても述べたい。

15. 二漢字語を介した介護専門用語学習について

中川健司・中村英三（常磐大学）・角南北斗（フリーランス）・齊藤真美（関西国際大学）

EPA 介護福祉士候補者は介護の専門用語を学ぶ必要があるが、用語の多くが漢字を含むものである。本研究では、二漢字語（漢字二字から成る熟語）を媒介にすることにより専門用語の学習の効率化が可能であるという考えに基づき、介護分野の教科書の索引の見出し語から二漢字語を抽出し、その傾向を調査した。その結果、専門用語のうち、二漢字語を含むものが全体の80%程度あり、学習の効率化がある程度可能であることが明らかになった。

16. Can-do statements 項目から回答者は実際何を想起するか

鹿嶋彰 (弘前大学)・保坂敏子 (日本大学)・島田めぐみ (東京学芸大学)

日本語学習者の多様化が進むにつれて、教師主導のテストの限界が指摘され、現在、学習者主導型評価である自己評価が重要視されるようになってきている。自己評価の一つである Can-do statements (Cds) は、既に信頼性と妥当性の高さが報告されており、精度の高い自己評価の尺度だと考えられる。しかし、回答者が能力記述文を見て、実際にどのような場面や状況を想起するかについてはよく分かっていない。そこで、本研究では、「話す」分野に限定して、国内の日本語学習者を対象に、回答者がそれぞれの能力記述文から具体的にどのような場面を想起するのか、どのように個々の能力記述文を解釈するのかについて、アンケートとインタビューによる小規模な調査を行った。その結果、回答者が該当場面の知識や経験を持っている場合、経験した特定の場面を想起すること、また、不安等の精神的な側面が自己評価を左右する要因となることが浮かび上がった。

17. 震災後の日本で留学を継続する背景—留学生へのインタビューを通して—

松本明香 (東京立正短期大学)・小笠恵美子 (東海大学)

3月11日の震災及びその後の福島第一原発事故は首都圏在住の留学生にも大きな衝撃を与えた。原発の状況は依然不安定で、多くの留学生が帰国を余儀なくされたが、大学に在籍する留学生の90%が新学期に合わせて日本に戻っていることがわかった。そこで、インタビューを通して、留学生が日本での留学生活を続けることを選択した背景に何があるのかを探った。

●ポスター発表 (上記5件を含む12件)

18. 日本語学習者の日本語使用状況に関する調査—「社会的文脈」「他者の存在」「自己の形成」という3つの観点から捉える—

菅智穂 (京都外国語大学 大学院生)

日本語の教室を一步外に出ると実際に話す機会がない、また相手が見つからないと訴える学習者に対して、教師はどのような指導ができるだろうか。日本語の習得を促進するためには、学習者自身が自らを取り巻く環境と、その環境との関わり方を意識し、日本語で接触する相手を段階を追って広げていくことが有効なのではないだろうか。本発表では、大学で学ぶ日本語学習者による日本語使用状況の記録及びインタビュー調査の結果とその分析結果を報告する。

19. 日本語学習者の読解—中上級者のワーキングメモリ容量—

渡邊芙裕美 (慶應義塾大学)

文章を読んでその内容を理解するためには、その時読んでいる文の内容を理解するだけでなく、すでに読んだ前の部分の内容も覚えている必要がある。このような認知処理を担っているのがワーキングメモリである。ワーキングメモリではインプットされた情報を一時的に保持すると同時に処理も行われる。このワーキングメモリの容量には個人差があり、この容量が読解力と高い相関関係にあることが知られている。しかし、これまで日本語教育の分野ではあまり注目されてこなかった。そこで本研究では、ワーキングメモリ容量を測るテストの1つであるリーディングスパンテストを用いて、日本語学習者のリーディングスパンを測定した。その結果、学習者のリーディングスパンは平均1.83と小さいことが明らかになった。

20. 日本語音声の評価研究—ベトナム人学習者の外国人なまりの分析から—

奥村匡子 (横浜国立大学 大学院生)

本研究はベトナム人日本語学習者の音声の評価研究である。ベトナム人学習者の発話中の単音の外国人なまりが、聞き手である日本語母語話者の印象にどのような影響を与えているかについて、日本語母語話者を対象に評価調査を行った。調査の結果以下のことが示唆された。1) 文中の単音の混同は、聞き手の発話の理解に影響を与

えている。また 2) 学習者の音声に対する日本語母語話者の評価には3つの観点があるという点である。即ち、a) 言いたいことがわかり、且つ聞きやすいという評価、b) 言いたいことがわかるが、聞きにくいという評価、c) 言いたいことがわからず、さらに聞きにくいという評価である。以上の結果から単音の外国人なまりも韻律同様日本語母語話者の受ける印象に影響を与えており、特に初級などコミュニケーションで文脈を作ることが難しい学習者にとっては、単音の習得も非常に重要な問題であると考えられる。

21. Can-do statement を用いたタスク型オーラルテスト評価の一試案

新井優子（筑波大学 大学院生）・和氣圭子・石上綾子・石田麻実・関崎博紀（筑波大学留学生センター）

筑波大学留学生センターの予備教育課程ゼロ初級クラスで、2010 年度秋・冬学期に実施したタスク型オーラルテストでは、評価方法を Can-do statement を用いたものに改訂した。タスクで取り上げる具体的な会話活動について、「やりとり」（タスク達成度評価）と「言語コミュニケーション能力」（言語構造的な能力評価）という項目に分けて構成し、それぞれのタスク内容に合わせて CEFR・JF スタンドアードにある Can-do statement を元に評価基準を設定していった。テストを実施した結果、学習者間の相対評価に陥りがちだった評価方法が改善され、言語能力をより客観的に評価できるようになった。一方、学習者の言語能力を明確に示しフィードバックするためには、学習者本人にも評価者にもわかりやすい形での評価シートの改善などが今後の課題である。

22. 現職日本語教師研修聴解クラスのための教材開発とその実践—樹形図作成課題を盛り込んだ授業デザイン—

大平幸（大田大学）・藤浦五月（大阪国際大学）

本稿は、韓国京畿道現職日本語教師研修聴解クラスのための教材開発及び授業実践の報告である。研修参加者は、現在の日常生活においては日本語を使用する機会は多くはなく、また新たに日本に関する情報に触れる十分な時間の確保が難しいという状況にある。そのため研修の授業においては聴解力を高めるだけでなく、できるだけ現在の日本の状況に即した素材に触れたい、そして日本に関する新たな情報を得たいという希望があった。したがって、授業の目標として、生教材を聴くことによって(1)聴解力を高め、(2)テーマとして取り上げた内容についての理解を深めること、さらに(3)参加者自身が自分にあった学習リソースにより学習環境を構築し、研修後も継続的な学習を可能にしていくこと、また、(4)これら一連の経験を参加者自身の授業実践の場において応用可能なものにするをあげた。本稿ではそのためのツールとして、各課の関連素材を一覧可能な形にした樹形図を紹介する。

23. 「3分節法」はスピーチをわかりやすくするか—中上級会話クラスのスピーチ改善へむけて—

菅原和夫（東北大学国際交流センター）

中上級の会話クラスの学習者はいろいろな表現、語彙を使って話すことができる。しかし、これも、あれも話そうとして話のまとまりがなくなり、何をいいたいのかわかりにくくなることもある。この問題を解決するために、話したいことを3つのポイントにまとめる「3分節法」を試みた。「3分節法」学習前のスピーチと学習後のスピーチを比較し、スピーチがわかりやすくなったかどうかを検討する。

【昼食について】

当日は、夏季休暇中のため、学生食堂は営業していません。大学周辺には、飲食店が多くあります（ランチマップを用意します）が、混雑も予想されますので、昼食をご持参くださることをお勧めします。近くには、スーパーやコンビニ等もあります。

【懇親会】

閉会の挨拶・片付け終了後、11号館2階ラウンジにて懇親会を行います。
ぜひご参加ください。会費は2500円です。

【会場案内】

京都外国語大学

■所在地

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL : 075-322-6012



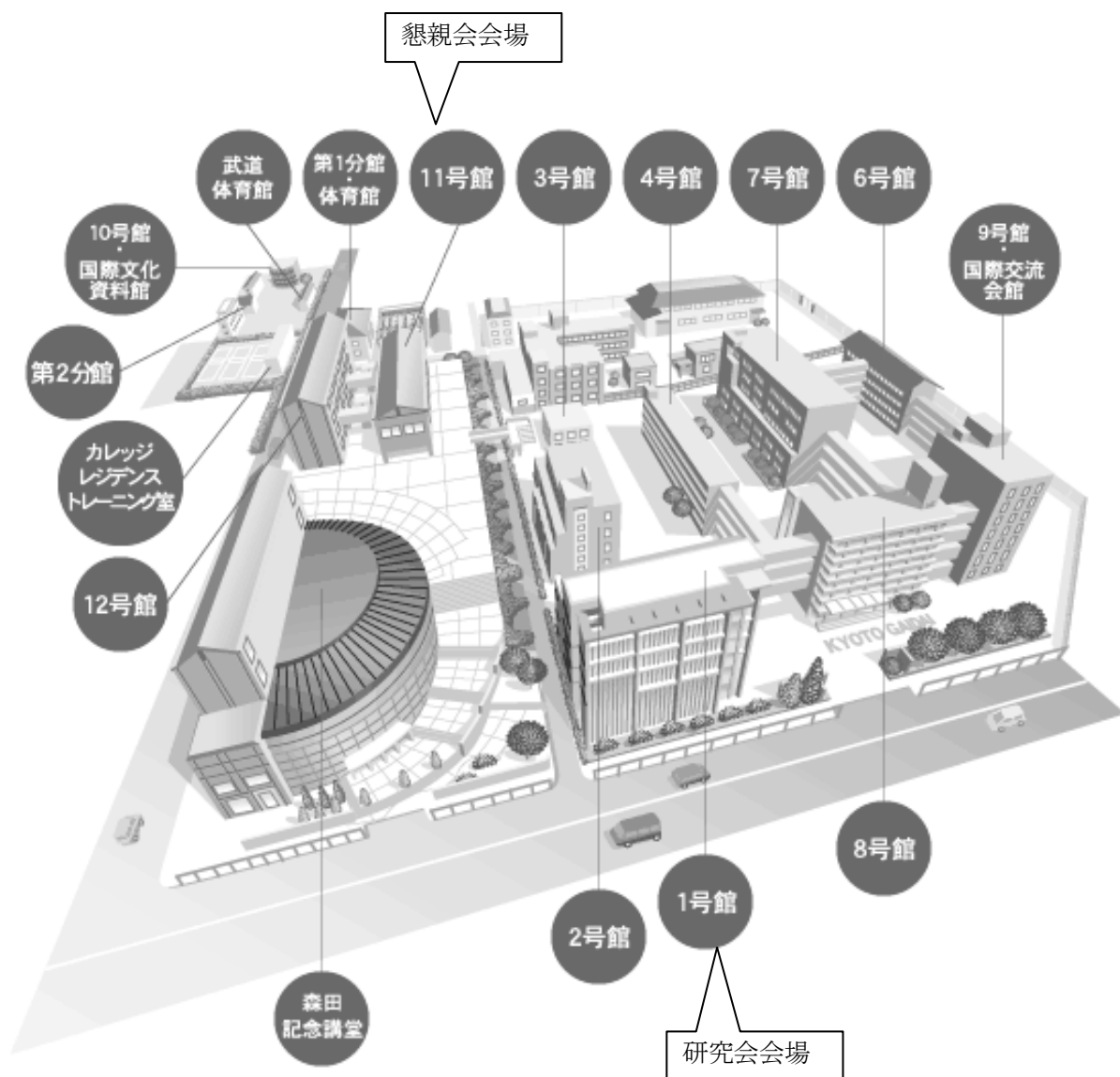
- ・ 阪急電車「西院駅」から、西へ徒歩約15分
または、「西大路四条（西院）」から市バス3・8・28・29・67・69・71に乗車、「京都外大前」で下車（乗車時間約5分）
- ・ JR「京都駅」
烏丸口から、市バス28に乗車、「京都外大前」で下車（乗車時間約30分）
または、京都バス81・83に乗車、「京都外大前」で下車（乗車時間約30分）
八条口から、市バス71に乗車、「京都外大前」で下車（乗車時間約30分）
- ・ 地下鉄東西線「太秦天神川駅」から、南へ徒歩約13分

*当日は、学内でオープン・キャンパスが開催されています。会場をお間違えないよう、ご注意ください。

キャンパスマップ

施設紹介

約 800 人を収容できる森田記念講堂をはじめインターネットが全館使える 1 号館や、国際会議の通訳を体験できる同時通訳演習室などの充実した設備が、学びの意欲を伸ばします。



1号館



【会費納入のお願い】

JLEMでは1月から12月までを会計年度としております。2011年度会費(3,000円)未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくことになりますのでご注意ください。会費は、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp(#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局から払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通(または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会